

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

# NASHIM

ヒバクシャ医療国際協力通信

Vol. 14  
2004  
SPRING

## 永井隆平和記念・長崎賞授賞式

主催 / 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会



第5回永井隆平和記念・長崎賞授賞式

Report ---】

講演会 -.....

From Korea.

Report .....

Information . .

第5回永井隆平和記念・長崎賞

「がんばらない」けど「あきらめない」  
一命・家族・地域・チェルノブイリを語る -

韓国から医師等を招聘

大韓赤十字病院視察報告

ナシムが大韓赤十字社から感謝牌  
JICA研修員が来崎





# Report

## 第5回永井隆平和記念・長崎賞

2月13日、今回で第5回目となる永井隆平和記念・長崎賞を、日本チェルノブイリ連帯基金（本部 長野県松本市 鎌田實理事長）に授与しました。



井石哲哉ナシム会長から賞状を授与

長崎・ヒバクシヤ医療国際協力会（NASHIM）は、原子爆弾による被爆者と放射線被ばく事故等による被災者に対する治療及び調査・研究等の分野において、ヒバクシヤ医療の向上・発展、ヒバクシヤの福祉の向上を通じ世界平和に貢献し、将来にわたる活躍が期待される国内外の個人または団体に、永井隆平和記念・長崎賞を隔年毎に贈っています。

日本チェルノブイリ連帯基金は、チェルノブイリ原発事故被災地で放射能災禍に苦しむ人々を救済するた

め平成3年（1991年）1月に設立され、日本全国の多数の一般市民を会員にして募金活動を行い、それらをもとにチェルノブイリ原発事故被災地に10年以上にわたり医薬品や医療機器を贈り、現地の医師たちと交流し、現地医療水準の向上に草の根的に努めてきています。これはチェルノブイリ原発事故被災地NGOの中で特筆すべき貢献であり、今後の更なる活躍が期待されることから今回の授賞となりました。

授賞式には、金子原二郎長崎県知事や内田進博長崎市助役をはじめ、医師会、病院、研究機関などからたくさんの方の医療関係者に出席していただきました。

また、ご推薦いただいた信州大学から小宮山淳学長や永井隆博士の次女の筒井茅乃さんも受賞のお祝いに駆けつけてくださり、授賞式後の祝賀会では受賞者を囲んで和やかな歓談が続きしました。

### 永井隆博士の次女・筒井茅乃さんのご挨拶

「父が長野県内での学会に出席したとき、列車の窓から見た茅葺きの家のある風景がとても気に入ったそうです。『茅野』（ちの）というところだったそうですが、あまりにも気に入ったので、生まれてきた子どもの名前を『茅野』と付けようとしたのですが、野原の“野”ではあまりにありふれているので、乃木大将の“乃”の字をお借りして『茅乃』（かやの）というふうにしたと、兄が亡くなる数年前に兄から聞いたことがあります。

今回、永井隆平和記念・長崎賞という父の名前の付いた賞を受賞した日本チェルノブイリ連帯基金の理事長さんが勤務されている諏訪中央病院が、茅野市にあるというのも、何かご縁のようなものを感じます。

日本チェルノブイリ連帯基金の今後のさらなるご活躍をお祈りいたします。」



筒井茅乃さんが受賞者に花束を贈呈

授賞式では、日本チェルノブイリ連帯基金を代表して鎌田實理事長は「自らを犠牲にしながらも、原爆で負傷して苦痛にあえいでいる人たちを治療し続けた永井博士の精神に医療の原点を感じます。今後、チェルノブイリ原発事故被災地で医療が充実していない地域での検診や、幼児期や働き盛りに被害にあった世代の健康のチェックあるいは治療につなげるシステムづくりに尽くしていきたいと思います。」と、抱負を語りました。



日本チェルノブイリ連帯基金の活動を紹介

## 受賞者紹介

- |         |                        |                     |
|---------|------------------------|---------------------|
| 1. 団体名  | 日本チェルノブイリ連帯基金（鎌田 實理事長） |                     |
| 2. 主な経歴 | 1991年1月                | 日本チェルノブイリ連帯基金設立     |
|         | 1992年10月               | ベラルーシ共和国保健大臣より表彰    |
|         | 1994年5月                | 第1回信毎賞受賞（信濃毎日新聞社主催） |
|         | 2000年4月                | フランチェスカ・スコリーヌイ勲章受賞  |

### 3. 主な活動歴

チェルノブイリ原発事故被災地で放射能災禍に苦しむ人々を救済するために、これまで72回の訪問団を派遣している。

主な医療支援活動は以下のとおりである。

#### 1) 小児甲状腺がんの診断・治療

- ・ベラルーシ共和国ゴメリ州で児童の甲状腺検診を行い、ハイリスクの子供たち23人を日本に招聘し、精密検査を行った。
- ・1991年～1998年、ミンスクの第一病院に小児甲状腺疾患の診断と治療のために専門医を派遣し、診断機器や手術機材を贈った。

#### 2) 小児白血病の診断・治療

- ・1991年より、高汚染地の子どもたちの免疫能調査（NK細胞の活性異常）を行った。
  - ・ゴメリ州立病院小児血液病棟に入院している年間のべ100人の血液疾患の子どもたちの診断・治療のために専門医の招聘研修、医薬品・医療機器の供与、日本からの専門医の派遣を行っている。
- 1997年より、ゴメリ州立病院移植部で、白血病の集中治療、末梢血幹細胞移植をサポートしている。

#### 3) 医療環境の整備

- ・検査の充実を図るための機器や試薬の供与、検査技師のトレーニング。
- ・信州大学医学部医療情報部が行っている遠隔地医療の衛星通信システムで、ゴメリ州立病院、ミンスク小児血液がんセンターを結び、診断・治療のカンファレンスを行っている。

#### 4) 新生児支援

事故当時の少女達が出産適齢期を迎えているため、安心して出産できる医療環境の整備と周産期医療の充実のために専門医を派遣している。

#### 5) 児童健康診断

高汚染地のボレーシェ学校で、全校児童150人の甲状腺と血液検査を定期的に行っている。



高汚染地の学校で健康診断を実施



# 「がんばらない」けど「あきらめない」 — 命・家族・地域・チェルノブイリを語る —

平成16年2月13日、長崎原爆資料館で開催した講演会での  
鎌田實日本チェルノブイリ連帯基金理事長の講演の一部を次のとおりご紹介いたします。

チェルノブイリ原子力発電所が1986年4月26日未明に大爆発をして、風が北側に吹いていたために、北へ北へ汚染地帯が広がって行きました。ウクライナ共和国にあるチェルノブイリ原子力発電所の事故は国境を越えて北側のベラルーシ共和国に主に汚染が広がって行きました。その汚染の最も厳しいゴメリという州の基幹病院を中心に、私が信州でやってきたような地域医療という手法を使って、そこに住んでいる人々たちの健康を守れないだろうか、命を守れないだろうかと考え、市民グループとして14年間行ってきました。これまでに72回、医師団を現地に派遣しております。21世紀に入っても永井先生が描いていた平和への期待はますます薄らいでおり、戦争は無くなっていません。私たちは信州大学や長崎大学の先生たちの学問的バックアップを受けながら、人間と人間はつながれるんじゃないか、国境があっても、民族が違って、宗教や言葉・文化が違って、人間と人間は必ず理解できると考えてきました。それは永井隆先生がたくさんのお書物の中の端々で、言葉として残されています。

永井先生は大学人でありながら、原爆が落ちた時に巡回診療という形で地域の、放射能で被爆された方々の命をなんとか支えたいと思って外へ出られ、永井先生だけでなく、多くの医療人が命を落としかけている人々を一人でも救いたいと思って、永井先生の言葉で言えば、「原子野」の長崎へ医療人たちが出ていきました。たくさんの医療人が、医療の原点みたいなものを大切にしながら、この地域で人々の命を救おうとしました。

ベラルーシ共和国の中でもやはり、何人もの先生たちが子どもの命を救おうとして命がけで仕事をしています。その仕事を私たちがボランティアとして応援をしてきました。

永井先生は自分が慢性骨髄性白血病に冒されていて、そのことをよく承知していて無理はできないとよくわかっていながら、「飛田」という地域から診に来てくれと言われると、一時ためらって

しまいます。永井隆先生ですらやはり人間で、とても行けないと思っていても心は揺れていて、困っている人がいる以上行こうと決心します。結局無理をされて行かれて昏睡状態になられて、命を失いかけてしまいます。

今年1月、ある新聞で全国の世論調査が行われ、日本の医療に対して国民がどう見守っているかという世論調査が行われました。私が頼まれてそのデータの分析をしながら論説をしましたけれども、現在の医療に対して6割の国民が不満足というか、満足していない、という結果でした。そうだろうなと思います。本当はもっと国民から信頼されている医療を展開しなければならないはずなのに、何かどこかで、ボタンの掛け違いが起き始めています。

医療の原点として、この長崎では原爆が投下された時、自分の命ですら危ない時に、苦難の中にある人の命を救おうとしている医療人たちがいらっしやいました。それは永井先生だけではなく、たくさんの医療人が命を救おうとして必死に働きました。実は今も本当はマスコミが批判するよりは、たいへん厳しい状況の中で、多くの若い医師や若い看護師たちが命を救おうとしています。永井先生の言われたことを医療人たちは時々はかみしめながら、医療の原点というものをもう一度見直して、国民が望む医療、住民が望んでいる医療はどういうものかということ、考えなければいけないかなと思っています。



スライドを使って熱心に講演される鎌田實理事長

## 宗教や言葉や文化を超えて人間は理解しあえるか

日本からチェルノブイリ原発事故被災地のベラルーシ共和国へ送った抗がん剤で、白血病を克服できた子どももいましたが、薬だけでは完治できない難治性白血病の子どもの命を救うために、今まで九人の子どもに、末梢血幹細胞輸血という初歩の移植療法を行いました。この方法だと、自分の細胞の移植なので、拒絶反応が少ないのです。しかし、治療のかわりに、ひとりの子どもが死にました。

その子どものお母さんが、今どう思っているのか、ずっと気になっていました。悲しみがあれば、その悲しみを聞いてあげたい、とっていました。ベラルーシ共和国の田舎の町で、死んだ少年アンドレイのお母さんから意外な話を聞きました。「私には忘れることができない人がいます。日本から、移植療法の看護を指導するために来た、若い看護師さんがいたでしょう。」アンドレイは、1997年2月14日、移植を受けました。それから4、5日、熱と口内炎のために、全く食事がとれなくなりました。母親として、見るに耐えない光景でした。日本から来た看護師さんが食事を工夫してくれました。

『何が食べたい?』、アンドレイの返事はありませんでした。

『何なら、食べられるの?』、何度も聞かれたアンドレイが小さな声で答えました。『パイナップル.....』、アンドレイは、それまでに1度だけ、パイナップルを食べたことがありました。

ベラルーシ共和国は経済が崩壊して、お店に行っても何もありません。ましてや、寒い国、パイナップルなんて、自国ではできません。

日本の若い女性は、マイナス20度に凍った町へ出かけて、見つけてきたのです。アンドレイ少年はパイナップルを食べました。それをきっかけに彼は1度元気になり、退院しました。

10か月後、白血病が再発して、アンドレイは死にました。お母さんは、思い出し、ちょっと涙ぐみながら語りました。

「でも、私たち家族は、2月の雪の町を、パイナップルを探し回ってくれた、日本の女性がいたことを忘れません」

人間は、命が助からなかったときだって感謝し、理解しあうことができます。国が追っても、文化が違っても、宗教が違っても、理解しあえるんだと思いました。



## 来場者アンケート

大腸癌が肝に転移し、命という事を考えなくてはいけない時です。講演会に参加させていただき、これからの希望にしていきたいと思えます。ありがとうございました。  
(50歳代・女性 主婦)

私も肺癌の手術をし、放射線治療を受けていましたが、最近退院して家庭で療養中です。なげやりな日々でしたが、今日の感動的なあ話を聞いたのをきっかけに、今後は一日々を大切に生きていきたいと思えます。  
(50歳代・女性 会社員主婦)

癌患者にとって、いかに家族の愛やきずが必要かということがわかりました。白血病患者の救援活動が72回も行われているということに驚き、今後がんばってもらいたいと思えます。  
(60歳代・女性 主婦)

鎌田先生から直接お話が聞けて、今日はとても感激しています。鎌田先生のような考え方をされる先生がなかなか身近にあらず、日々の仕事にむなしさを感じる時が多いです。今日は少し癒されました。  
(30歳代・女性 病院関係者)

最後の方のパイナップルの話が印象的でした。永井先生が大好きで、先生の本を何度も繰り返し読んでいます。永井先生の魅力とは何でしょう。それは病気をみるのみでなく、人間をみるという姿勢、そして人間を愛する思いでありましょう。  
(20歳代・女性 学生)



# “アンニョン ハシムニカ”

## 韓国から医師等を招聘

ヒバクシャ医療の研修と交流を目的として、今年度後期に韓国から12月と3月に看護師4名、事務職員4名の計8名が来崎しました。

研修者一行は長崎原爆資料館や国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館をはじめ、平和公園や、原爆落下中心地などを見て回りました。

その後、ナシム会長を訪問し、県庁で原爆被爆者対策の説明を県や市の職員から受けました。

研修二日目からは、日赤長崎原爆病院や長崎市原爆被爆者健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム、原爆被爆者特別養護ホーム「かめだけ」、長崎大学病院、放射線影響研究所、長崎大学原爆後障害医療研究施設で研修や視察を行いました。



長崎大学附属病院で看護状況を視察

ソウル赤十字病院の文淑子看護師長は、

「患者に関するのですが、一週間分の薬を自分が管理して服用しているという話を聞いてとても驚きました。韓国の病院では、1日ずつ、決まった分を飲むよう指導しなければなりません。そうしないと、一度にたくさん飲んでしまったり、また全く飲まない患者がいるために、とても困ります。お風呂の使用については、有料です。なぜかという、患者の家族も使用する場合が頻繁にあるためです。こちらの病院で浴室使用規則が徹底して守られているのは、患者たちに限ったことではなく日本の国民性から出ているのではないかと思います。」と感想を述べられました。



「かめだけ」で入所者を慰問

### 2003年度・後期 韓国人医師等受入研修者名簿

研修期間	所属	職名	姓名
11月30日～12月6日 (7日間)	ソウル赤十字病院	看護師長	文 淑子 ムン・スッチャ
	大邱赤十字病院	看護師長	黄 貞愛 ファン・ジョンエ
11月30日～12月4日 (5日間)	仁川赤十字病院	庶務課長	千 萬錫 チョン・マンソック
	大韓赤十字社政策企画課	幹事	李 東洙 イドンス
2月29日～3月6日 (7日間)	大邱赤十字病院	看護課長	朴 美鶴 バク・ミハク
	陝川原爆被害者福祉会館	看護師	姜 美敬 カン・ミギョン
2月29日～3月4日 (5日間)	大韓赤十字社	南北交流局長	李 宗根 イ・ジョングン
	◇	在外同胞課長	金 尚裕 キム・サンユ



## 大韓赤十字病院視察報告

日本赤十字社長崎原爆病院看護部長

中尾 初美

ソウル赤十字病院を視察

今回、図らずも長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）による専門医師等派遣事業の一環として、在韓被爆者への医療を提供している大韓赤十字社のソウルと大邱の赤十字病院を視察する機会を得たのでご報告いたします。

韓国から被爆者医療の研修で来られる大韓赤十字病院の看護師を円滑に受け入れるにあたり、韓国の病院事業や看護体制を把握し、実際の看護現場の様子を把握しておくことはたいへん重要であり、今回の視察となったものです。

期間は平成16年2月24日～26日の3日間で、同行者は長崎大学附属病院下田澄江看護部長、日本赤十字社長崎原爆病院中島誠司医療社会事業係長、ナシム事務局草場里見書記の計4名でした。

まず最初に、大韓赤十字本社を訪問し、朴炳大事務総長を表敬訪問しました。朴事務総長は、「ナシムが韓国の医師等の研修受け入れを長年行っていることにたいへん感謝しています。在韓被爆者のために役立っています。」とお礼を述べられました。次に韓国の被爆者の援護事業を実施している特殊福祉事業所を訪問し、ペ・ファンズ所長ら職員たちと懇談しました。その中で、長崎の高島炭坑で被爆した人のことを書いた小説が「カマギ」（からす）という名前で出版されているとして、実際に現物を見せていただきました。日本語訳でぜひ読んでみたいと思いました。

さて、大韓赤十字病院は全国に6病院あるそうですが、今回はソウルと大邱の2病院を訪問しました。ソウル赤十字病院は1905年創立で実働病床299床の総合病院です。13診療科で医師は55名、看護師は91名です。大邱赤十字病院は1945年創立で実働病床134床、6診療科で医師は9名、看護師は36名です。

いずれも赤十字の愛と奉仕の原則に沿った活動を旨とし、外国人労働者やホームレスの人々の健診、入院治療、独居老人の介護などいわゆる恵まれな

い人たちを主な対象に医療活動をしています。被爆者医療はその中のひとつとして位置づけられ、ソウル赤十字病院では、昨年1年間に外来延べ380名、入院1～3名/月の治療が行われていました。大邱赤十字病院では、訪問した時、4名の被爆者が喘息、慢性閉塞性肺疾患、関節炎などで入院中でした。近郊の陝川原爆被害者福祉会館と連携し、必要な時に入院治療をしているそうです。また、私たちが大邱赤十字病院を訪問すると聞いて、長崎原爆病院や長崎大学病院で渡日治療を受けた韓国原爆被害者協会女性会の金会長他会員2名が、病院に訪ねて来てくださいました。検査を受けたが痛みの症状はまだとれないとつらそうでした。流暢な日本語を話され、しばし長崎の思い出話に花が咲きました。

最後に、日本の病院と違う点をご紹介しておく、病室の各ベッドの下に付き添い者用ベッドが置かれセットになっていること、ボランティアが大勢活躍していて、その中には運転免許違反で裁判所から社会奉仕の命令を受けて来た人もいること、韓国のほとんどの病院は建物の中や敷地内に立派な葬祭場を持っていて、亡くなられた方はそこで葬式を済ませるのが一般的であること、したがって、大邱市内では民間の葬祭場は1軒もないということでした。

在韓被爆者医療の現状と併せて、医療が国や文化の違いによって様々な形態をとっていることを学んだ3日間でした。



大邱赤十字病院を視察



## ナシムが大韓赤十字社から感謝牌

1905年10月27日に創立された大韓赤十字社は昨年98周年を迎えましたが、創立98周年記念式が行われた10月27日、ナシムは、大韓赤十字社の徐英勲総裁から「事業支援」部門で感謝牌を授与されました。

大韓赤十字社が求めている人道主義精神の具現と、韓国人被爆者のための惜しみない支援に感謝するという意味で、感謝牌を贈呈することにしたとのことです。



感謝牌



井石哲哉ナシム会長へ感謝牌を贈呈

ナシムは平成7年度から毎年、

韓国の医師や看護師等を被爆者医

療研修に招いており、15年度末現在その数は45名に上っています。

感謝牌には「貴協力は、赤十字の人道主義運動に積極的に関与され、人々の苦難の軽減と福祉の増進に大きく寄与されたので、深甚なる感謝の意を表します。」と書かれています。感謝牌を贈呈された井石哲哉ナシム会長は「今後とも世界のヒバクシャのために貢献したい」とお礼を述べました。

## JICA研修員が来崎

旧ソ連で核実験が多数行われ、「世界の核汚染地」の一つとなっているカザフスタン共和国・セミパラチンスク地域の医療改善のため、地域医療改善計画、管理手法を習得することを目的として、カザフスタン共和国から4名の医師団が昨年10月来崎しました。

研修員はアンダグロフ東カザフスタン州保健局長をはじめ、チウビリョフ東カザフスタン州立診断センター院長、サンディハエフ東カザフスタン州立癌センター院長、トゥルタエフ東カザフスタン州立アカデミー付属病院長の4名で、独立行政法人国際協力機構（JICA）の事業により、「保健行政」研修の一貫として来崎したもので、県の福祉保健行政の説明や長崎市から原爆被爆者行政についての説明を受けた後、長崎大学大学院原爆後障害医療研究施設で遠隔医療支援システムを視察しました。

また、長崎市原爆被爆者健康管理センターで被爆者の健康管理の手法を熱心に聞くとともに、健康診断の様子も見学しました。恵の丘長崎原爆ホームでは被爆者養護の状況を視察した後、被爆者から悲惨な被爆体験を聞いて、核実験で汚染された同国の被災者に対する思いを新たにされた様子でした。また、日赤長崎原爆病院では日本の進んだ医療現場をたいへん興味深そうに視察していました。



長崎市役所で原爆被爆者行政について説明を受けたカザフスタンからの研修員